

本と社会

「人文ネットワーク」ニューズレター
2003年11月15日 第6号

●発行元 人文ネットワーク
●印刷 (株)新栄堂 ●編集制作 (株)新評論編集部
●事務局 (株)新評論編集部内(担当:吉住)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-16-28
Tel.03-3202-7391 Fax. 03-3202-5832
E-mail: shrn@eagle.ocn.ne.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性の中に腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニューズレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介します。

巻頭インタビュー

『シャルラタン』著者 蔵持不三世の世界

無数の事実から編む〈非正統の歴史学〉

シャルラタンとは…巧みな口上とパフォーマンス、怪しげな薬で民衆に「快癒の夢」を売り歩いた、近代前夜ヨーロッパの周縁者たち。彼らは偽薬やいかかわしい医療のために断罪されながらも、医・薬学の制度化=近代化をもたらし、演劇・文学にも大きな影響を与えた。現代の巷に溢れる医薬部外品、商業主義に基づく誇大宣伝、イメージ戦略もまた、彼らの異能的商法の末裔であり、集团的・社会的シャルラタニズムの形態と呼ぶこともできる。

●とてもユニークなテーマで、世界でも類のない民族歴史学の成果を上梓されましたが、まず執筆の動機からお聞かせ下さい。

「シャルラタン」というテーマに出会ったのは、長年行っているフランスでの民俗調査の過程でした。そういえば、自分もまた子供の頃に香具師、いわば日本的シャルラタンに幾度となく接したことがある。そう思って史料を調べていくうちに、フランス近代史の中で、彼らが多様な役割を担っていたことが分かってきました。何よりも興味深かったのは、社会的な差別の対象だったはずの彼らが、じつは医療や医学教育の近代化や制度化のみならず、演劇や文学の世界でも重要な貢献をしていたこと。とすれば、彼らに視点をあてれば、これまでになかった**新たな歴史の再構築**ができるのではないか。これが本書を書こうとした動機です。かなり長大な本になりましたが。

●そのために駆使した一次史料も膨大な量だそうですね。「再構築」の手応えは？

史料集めにはかなりの時間がかかりました。とりわけ古文書館での筆写は難渋しました。モンペリエでは、またまたマル・ロワ・ラデュリの『南仏ロマンの謝肉祭』の翻訳も並行してやっていたので、頭の中にはつねに彼の史料調査のことがありました。ただ、「あとがき」にも書きましたように、膨大な史料は半分ほどしか使っておらず、残りをどうするか、目下思案中(笑)。ともあれ、書き終え

て、自分の歴史観のキーワードが**諧謔と転位**にある、ということに改めて気づかされました。ひとことで言えば、「**非正統の歴史学**」。歴史の再構築には、あるいはこうしたシャルラタニズムも必要ではないのかとも。歴史の中の無数の事実をどのように再編集してテキスト化するか。門外漢の戯れ言かもしれませんが、自分としては、そこに歴史学の醍醐味があるような気がします。

●ところで、本書で示唆的に使われている、「歴史は祝祭である」の意味は？

そうですね、ちょっと奇をてらった言い方かもしれません。たとえば、こんな話はどうでしょう。パリのカフェでコーヒーを飲みながら、ボーッと道行く人の顔を眺めている。そこでついと気がつくのです。あ、これが歴史だと。人々の流れと時間の流れ。そして、さりげないその流れの中に、いつしか自分も流れている。わたしの祝祭研究もまさにその流れを見つめ、見つめられるところから出立します。バタイユなら内密性というのでしょうか、流れの上で飛び跳ねたり反転したりする大波やさざ波。こうした**表象的なマイクロ・ヒストリア**——わたしの言葉では**祝祭**となります——を、フィールドに立って外側と内側から解析する。なかなか魅惑的で興奮できる作業です。波の無限の変容を見るだけでもそうですが、流れの正体や波との関係も見定めなければならないのですから(苦笑)。

●仏教の「空」を思わせますね。本を書くこと自体にもそうした概念が投影されているのでしょうか？

いや、たいしたものではありません。ただ、**唯識**には関心があります。時間を切り取れば、存在はなくなりますが、時間自体はある。どうしてか。いろいろ考えて最終的に行き着いたのが、「有」という概念です。具体的に言え

ば「点」。『ウパニシャド』で哲人が自分は何かと問う息子にこう答えていますね。お前は「それ」であると。**存在としての点**。ペン先の大きさから太陽、いやそれ以上の大きさにもなり、と同時に万物をつくる。こうした発想には今も惹かれています。気障ですかね？



くらもち・ふみや
1946年生れ。早稲田
大学人間科学部教授
フランス民族学専攻。

●いや、むしろそういった思想的ベースこそ、どんな人々読者、つまり社会に開示して欲しいですね。

点から波紋へと広がっていく。今はそんなことを考えながら書いていますが、わたしが読者に提供できるのは、**ものの見方や考え方のモデル**です。既成の解釈や定説にはあまり拘泥しません。むしろそれを再検討し、時にはひっくり返すことで、読者との間に知的な架橋を構築したい。そんな風にも思っています。もとより独善や偏見といった批判は覚悟の上です。問題は、どこに点を見出すか、どこまで波紋を広げられるかにあります。次作のテーマはパリの大泥棒。義賊でもない彼がなぜ英雄になったか。その過程を通して民衆文化の一端を解析し、波紋の興奮とざわめきの面白さを何とか読者に伝えたい。シャルラタニズムですかね？ これも。

(インタビュー：新評論編集部、'03.10.10)



『シャルラタン』
——歴史と諧謔の仕掛人たち——
蔵持不三世・著

周縁者たちを(文化の創造者)として捉え直し、諧謔に満ちた歴史の装置を読み解く、世界初の《シャルラタン文化史》!
(A5上製 576頁 図版資料多数
税込定価5040円 新評論刊)

2003年9月27日、早稲田大学人総研分室で行われた当会第15回例会には、『シャルラタン』の著者・蔵持不三をはじめ、桑田禮彰、土屋進、白石嘉治、出口雅敏、大野英士と、久しぶりに全メンバーが参集し、正統と非正統の「転位」、シャルラニズムとレトリックの関係など、本書のテーマをめぐって活発な議論が交わされた。以下は各人の発言要旨。(編集/大野)

シャルラタンと歴史の諧謔

蔵持 私は、歴史というのは一つの祝祭・カーニバルだと考えていますが、シャルラタンに出会ったのも祝祭の文献を渉猟していた時でした。

タバラン、グラン・トマ(本書に登場する17~18世紀の人物)といったシャルラタンは「正統」な歴史や文学史の中では存在を認められていないにもかかわらず、膨大な知識量を誇り、いわば歴史=祝祭の「諧謔」を体現していました。そして、民衆とはいえば、そうした彼らの「いかさま性」を知りながら、彼らの存在と価値を認めていました。

歴史の中でのシャルラタンのあり方を見ていくと、彼らの中では正統と非正統、正と負とが逆転しているのがみとれます。彼らは非正統の「転位」を生きた存在でした。

例えば、近代医学という「正統」は、ある意味で、シャルラタンという「非正統」を、

同業者組合の規約や医学教育という制度によって差別化することで、はじめて自分たちのアイデンティティを確立しました。負の側が正の側を立ち上げていかせる重要なモメントになったわけです。しかし、革命以降は、革命主義者によって分裂させられた正統側の一部が、逆にシャルラタンとして社会的に断罪されていくという傾向が確認できます。さらに、現代では、あらゆるものがその延長に位置づけられ、社会化されたシャルラタニズムの徴表を帯びているといえなくもありません。

歴史は「歴史家=再編集する人間」の主観・計算・たくらみを通じてしか語り得ない。それを語るということは、優れてシャルラタ的な行為といえます。今回の執筆を通じて、語り得ないものを語ることの喜びと難しさを改めて感じました。

揺れ動く「正統/異端」の境界

土屋 朝日新聞(9/14)で種村季弘氏がこの本に対して書評を寄せていますが、『詐欺師の楽園』をはじめとする彼自身の著作では、正に「異端」が民衆の視線に寄り添うかたちで一つの物語として語られます。「歴史の裏側から語られた歴史」という意味で、非常に爽快感を覚えますが、そこで提出されるのはしばしば、正統の単なる裏返しとしての異端であり、異端が本来持つ「力」がそがれているような印象を与えます。

蔵持さんの仕事の特徴は、シャルラタンという記述対象をそれ自体切り離すのではなく、異端と正統——「浜辺」と「海」との間の絶えず揺れ動く境界(リジエール)がどのように確定するかという、いわば構造化のダイナミクスが、史料を通して実に丹念に追われている点にあるように思います。

イラク戦争を見ても、権力が次から次へと

新たな異端を作り出し、そうした異分子を共存し得ない他者として排除していくという傾向が続いていますが、この本は、正統と異端との境界が画然と区切られた世界に慣れた視線を、それとは異なった見方へと開いてくれる可能性を含んでいるような気がします。

現代における正統のハイブリッド化

出口 私の関心は現代社会における周縁性の問題なのですが、現代では、正統科学と擬似科学を区切る境界線は消失し、正統と異端の対立そのものが、かつてあったような形では存在していないのではないかと感じています。例えば、正統医学の側からみれば、確かに民間療法と自らを分ける識別は、公式には厳然として存在しているのでしょうか。しかし、そ



座談会の模様

うした言説圏に属さない非専門の立場から見ると、両者の関係はきわめて曖昧で、多元的です。さらに、従来異端を排除してきた「正統」=近代(西洋)医学による、東洋医学を含む民間医学・民間療法の再評価の動きも進行しています。現代では正統すらもが、ハイブリッドなあり方でしか存在できないのです。

シャルラタニズムとレトリックの復権

白石 フランス17世紀、特にポエジーの専門家の立場から注目したいのは、蔵持さんの本の末尾近くに引用された『寓話』の一節で、

シャルラタンに対する寛容さ

●桑田禮彰(駒澤大学教員/哲学)

シャルラタンとは「客寄せの芸人たちを引き連れ、どこからともなく定住社会に闖入し、祝祭や大市などを格好の舞台として、巧みな口上よろしく生半可な医術を営み、怪しげな薬を売りつけては、いずかたともなく去っていった周縁者たちの謂い」だとすれば、そうしたイカサマ医者であり大道薬売りとしての一種の詐欺師シャルラタンが生息しうる以上、当時の社会空間を構成する観客=被害者としての庶民たちは、現代の私たちと比べ、騙されやすく、しかもおおらかで寛容だったのかもしれない。しかし、「市民法ハ醒メタル者ノタメニ記サレタリ ius civile vigilantibus scriptum est」として詐欺を処罰の対象としないローマ法ないし古代ゲルマン法の伝統がなお残っているとすれば、詐欺に対しては私たちよりはるかに醒めており、むしろ「醒メタル者」としての義務が、被害者を寛容にしていたようにも思える(「騙されるほうが悪い」)。そしてその寛容さは、周縁者の存在領域というかたちで、非暴力=非権力地帯を明確に見極め、そこに或る種の価値を認める優れた仕方ではなかったか。詐欺師=周縁者=放浪者シャルラタンは、カントの言う「世界市民」の「訪問権」を与えられていたと言えないか。

シャルラタンとゲリスール

●大野英士(早稲田大学他、教員/文学)

シャルラタンの何と精彩に満ち、彼らの何と「現代的」に見えることか!自分たちの商う薬の現実的な効果を自ら信ずることなく、言語のレトリック効果やスペクタクル性によって、空虚な中心に過ぎない彼らの「製品」を売る!彼らは、ほとんど、ギー・ドゥボールのいう情報資本主義=「劇場化社会」や、ポストモダニズム、広告会社の宣伝戦略を先取りしているかに見える。

片や、シャルラタンに替わって19世紀に登場した民間治療師は、シャルラタンに比べはるかに古風に見える。タイラー、フレイザー等が原始社会・未開社会の思考として描いた感応魔術やフェティッシュは、科学主義を謳歌した当時の西欧民衆の日常でもあった。そして言葉に宿る呪術的な効果というゲリスールの原理は、フーコーが「20世紀の特権的な知」と称したフロイトにもその基本的な発想を提供している。

しかし、言葉の呪術性を「転移」と呼んで、自らのシステムに組み込んだフロイト以降、ゲリスールを何かアルカイックで滑稽な前世紀の残滓と見せてしまうような「認識レベルの地殻変動」が生起していたことを見逃すべきではない。(シャルラタンの近代性)/ (ゲリスールの擬古性)という構図は、近代の知の遠近法の歪みが作り出した錯視にすぎないのか?

ラ・フォンテーヌがシャルラタンを「大言壮語する人」と評し、彼らを医学ではなく、言葉に結びつけていることです。シャルラタンとは、彼にとって、「レトリックを弄し、実がないが、現実を知悉している人々」でした。そして19世紀の末から20世紀の初頭、レトリックが信用ならないものとしてその価値を失墜し、大学進学に必要な文系の必修科目からもはずされるのと相即的に、シャルラタンも歴史の舞台から消えていきます。

ところで、1960年代半ば、ロラン・バルトはパリ高等社会科学研究院のセミナーで、言葉を「意味」に結びつけて考えるのではなく、言葉が現実にかける「効果」を重視するレトリックの伝統を復活します。そういう意味で、ロラン・バルトを現代のシャルラタンと呼んでもよいでしょう。

「意味のある、正しいことを言おう」という人間はある意味で、ただ権力が欲しいだけかもしれません。現代の批評性の立場というのは、「効果的な言葉を使うことにより、現実にかきかけよう」とすることです。もちろん、言葉が「効果」にシフトした場合には、常に商業主義の問題がつかまといます。しかし、言葉が現実との接点を取り戻し、現実に対する批評性を発揮していくためには、敢えて、シャルラタニズムのこの肯定的な側面を評価していく他ないのではないのでしょうか？

シャルラタンは歴史を超越した存在か

大野 敢えて批判的な読みをお許しいただくなら、シャルラタンとは今日までの7世紀を越える歴史を通じ、現実に存在した社会集団なのか、それともある属性に注目したときに見えてくる、必ずしも一貫したアイデンティティを持たない風俗・現象に与えられた総称なのか、という疑問が、この大冊を読み終わ

った後でも消えません。

この疑問は、恐らくこれほど長い通時的軸を扱っていないながら、むしろ蔵持さんの視線が、シャルラタンを、歴史を超越した共時的・構造的な契機ととらえる方向に向けられており、「シャルラタンはトリックスターである」あるいは「そうあって欲しい」という、暗黙の前提ないし期待に支えられているからではないかと感じるからです。従ってその歴史記述も、シャルラタンという社会的現実の継時的変化をたどるというより、歴史を越えた大きな構造の存在を証明する一種の挿話的な例として提示されているような印象を持ちます。

この書物はこの時代の医学の歴史を扱ったものとしては例外的にフーコーへの言及がありません。それがまたこの本の強みであるのは確かです。ただ、いま述べたような事柄が著者の基本姿勢の中にあるならば、自らの文化こそが「正統」であるとする現在でも根強い西欧中心主義的な伝統に対してフーコーが行った知的構築に、この本が何らかの批判ないし対話になり得ているのかという問題が残るような気がします。

一次史料を用いた「正統」な研究

桑田 この本が異端の側に立って書かれているという単純化は間違いです。この本の眼目は、蔵持さん自身も語られているとおり、正統と異端の転換—転位です。シャルラタンについて語っていると、正統の側も怪しげに見えてくるし、また正統の側に分類されているような人間ですら、シャルラタ的なもの思わず魅せられてしまう。正統と異端のステッキな構図全体が揺らいでくるところにこの本の醍醐味があります。

また、民衆的な層に照準を合わせたフランスの歴史の再構築が、一次史料によって達成



現代の南仏ニースの祝祭「マルディ・グラ(肉食の火曜日)」

されたという意味で、すばらしいお仕事です。歴史の分野の仕事で一次史料にあたるのは当然ですが、さて、日本でどれだけの歴史家が一次史料にあたって論を組み立ててきたでしょうか？ 蔵持さんの態度こそ、歴史家としてきわめて「正統」的だといえます。

長期にわたって準備されたライフワーク的な大作ですが、さらっとした筆致で、そこにも「蔵持美学」を感じます。

既存のカテゴリーを作り直す民衆文化

蔵持 歴史的な物事を語る時、常に一方的な見方が優先してきました。命名は権力性と結びついています。シャルラタンの周縁性は、結局彼らが規約や守護聖人を戴く同業者組合を組織しなかった点にあります。こうしたヌエ的な存在ともいえる彼らをシャルラタンと呼んだのもまた、当時の正統であり、民衆とは直接関わりがありませんでした。逆に、既存のカテゴリーが自嘲的に作り直されてくるところに、民衆文化の本質が見出されます。

指定された現象も、視座を移すことで、違う形で見えてきます。それをとらえるためには、民俗学・文化人類学、アナル派歴史学の共時的構造に関わるものを洗いざらいすくい上げ、史料から自ずと立ち上がってくるように再編集する必要があります。私がこの本を通じて追究したのは正にこうした手法です。

民衆知あるいは統合的社会的身体

●土屋 進(中央大学他、教員/現代思想)

「シャルラタン」の始まりは、「民衆知」と言うべきものの一つの表れではなかったか。ある時代には、社会と文化と科学が「響存」する民衆の生活情報ネットワークの中に、「拔牙」「摘出」といった外科技術、暗示効果による心療技術、そして薬草知識などが埋め込まれていた。それは同じように埋め込まれていた受容すべき「死や病」と微妙なバランスを保ち一つの社会的身体を構成していた。そういった社会的身体をメタファーとして表象し、具現したものが「シャルラタン」ではなかったのか。ちょうど祝祭空間が「阿呆の王」に受肉するように、民衆内部の想像力は「シャルラタン」に受肉していたと言えるだろう。権力は自らの正統性を主張する過程で、それまで「響存」していた世界に分断線を引き、異端を生み出す。あるいは新たな意匠に沿って分断線を引き直す。科学的な合理性を持つ近代医学は、正統性を確立する過程で「シャルラタン」を排斥し、「病と死」を社会から切断した。それに伴い、「病と死」は、社会的「受容—文化」から科学的「排除—治療」の対象になり、「民衆知」と言える社会的身体は、解体されてしまったのだ。

シャルラタンとアンダーグラウンド

●出口雅敏(早稲田大学人総研研究員/文化人類学)

学生時代、自己啓発セミナーがロコミで広がっていた。友人に勧誘され、参加してみた。そこでは、心理療法ふう、行動療法ふう…当時、大学でもかじっていたカウンセリングの真似事が、参加者同士で行なわれていた。

現代のシャルラタンは、「本当の自分」も売り物にする。こうしたセミナーでは、いわば、本当の自分になる薬が実演販売されているのである。

だが、かつてのシャルラタンの関係と異なる点もある。なぜなら参加者にとって、「騙す者」と「騙される者」との境界線が消失しているからだ。彼らは、騙されないために自らを騙す。また、「社会を疑う」こともない。葛藤の原因が、自己実現を鼓舞する社会の在り方にもある、とは考えない。

だから彼らが共生する場合は、社会のアンダーグラウンドに建設された夜中の修理工場に、どこか哀しく似てくるのだ。会社で、学校で、家庭で…屋間の社会生活の円滑化に支障を来たさないために、心や感情を部品化し、それらのパーツを交換する。剥がれた心にボルトが打ち込まれ、緩んだ頭のネジがしめ直される。そこで見失われているのは、「騙される」ことで創出されるはずの、自分が社会と対峙する固有の契機ではないか。

書評

蔵持不三也

これまでかなり多くの書評を書いてきたが、自著の書評をクリティックするというのは初めてであり、正直、面映ゆいものである。ましてや、筆者がその足跡をおぼつかない足取りながら必死に辿ってきた種村季弘氏『朝日新聞』9/14)と田之倉稔氏『読書人』10/31)、さらにジュンク堂書店池袋本店の福嶋聡氏(①人文書院WEB上連載「本屋とコンピュータ」31、②ジュンク堂広報誌『書標』9月号)の全体的に好意的な書評に対し、いったいどのようなクリティックをすればよいのか、戸惑いを禁じえない。

種村氏の書評は、本書の重要な仕掛けである、《歴史の諧謔性》と《文化の生態系》(この言葉こそ使われていないが)に着目されている点で、筆者としても我が意を得たりの想いがある。また、数年をかけた史料の収集・解説に評価をいただいたのも、末文の「ひさしぶりに胸のうちがスカットする」という望外の感想ともども、これからの仕事に大きな励みとなる。

これに対し、田之倉氏は、本書の基底に山口昌男氏の道化研究があることを指摘されている。同様の指摘は、じつは他からも頂戴している。たしかに万華鏡的なヤマグチ・ワールドなしに本書の成立はなかった。一方、氏の独壇場であるコンメーディア・デッラルテ(シャルラタンが引き連れていた芸人の出自であるイタリア喜劇)に関する記述に新味さが欠けるとの批判もあるが、本書がもっともページ数を割いたシャルラタンと医学史の関連を、「類書にはない、本書の最大の特色」とされているのは嬉しい。

書店業界に名高い福嶋氏の2つの書評は、いずれもまことに痛快なものである。①で氏はシャルラタンの批判精神を自ら引き受けようとし、②では「フーコーやカル・スタを引き合いに出さずに本書をものした」とされているのだ。とりわけ後者は、迂闊にも氏に指摘されるまで気づけなかった。これまでの著作で縷々言及してきたにもかかわらず、である。

さらに、3人の評者はどうやらシャルラタンの復権を密かに狙い、返す刀で現代のシャルラタニズムを指弾する筆者の共犯者であってくれる。心強い限りである。とすれば、この国の風景の中で、これからシャルラタンがどこへ赴こうとしているのか、紹介者として、その行方だけはしっかり見届けなければなるまい。

シャルラタンと民衆文化を知るための関連書

*価格は全て税込

★山師カリオストロの大冒険(種村季弘 岩波現代文庫 '03 1050 円)ヨーロッパ各地で医術・錬金術・予言などの奇蹟を演じたカリオストロ伯爵の、わが国唯一の評伝。美顔水や回春剤で大儲けを企んだこの稀代のいかさま師はシャルラタンそのものといえる。

★ノストラダムス百科全書(P. ラメジャラー/田口孝夫・目羅公和訳 東洋書林 '98 2625 円)16世紀という時代の背景を絡めつつノストラダムスの生涯を詳説。「予言者」のイメージにとどまらず、医師、パテン師、思想家としてのノストラダムスの全容を解明している。

★詐欺とペテンの大百科(C. シファキス/鶴田文訳 青土社 '01 5040 円)悪ふざけ、ホラ、作り話、でっち上げ、贋作、かたり、偽造品などを集めた世界パテン大全。エッフェル塔大特売、マンハッタン島切り離し大計画など、したたかな「騙しの想像力」。

★フランソワ・ラブレの作品と中世ルネッサンスの民衆文化(M. パフチーン/川端香男里訳 せりか書房 '95 6825 円)歌い、飲み、踊る猥雑なエネルギーに満ちた中世民衆の姿を、ラブレ文学をテキストに画期的な方法で読み解き、現代思想に決定的な影響を与えた、文化記号論の名著。

★南仏ロマンの謝肉祭(カルナヴァル)(E. ル・ワテリ/蔵持不三也訳 新評論 '02 5775 円)南仏の小都市で繰り広げられた叛乱・反税闘争の連鎖を解析し、16世紀の(全体的社会事実)を描くアナル民族歴史学の成果。シャルラタンを生かした民衆文化のかたちがよく見える。

書店からの声

●阪急ブックファースト渋谷店 永岡達郎

渋谷はセンスを刺激する。容姿にさまざまな個性を表現した人々が集い、ファッションやアート、果てはセクシュアルな領域を生業とする者も多い。この街で「シャルラタン」を大きく扱うことには意義がある。そう確信し、フェア実施を決めた。書物を選ぶにもセンスがいる。しかし、文章には、センスだけではキャッチしえない力がある。そう思っ、あえて本格的な内容、分量500頁といった読み応えのある代物ばかりを集めた。古い時代に典型からはずれた文化の担い手たち、山師・香具師・いかさま師…「シャルラタン」たちは、生き方そのものが独特のセンス。それは渋谷の現代人のセンスによってきっと熟読され、理解される、と私は「感じた」。事実、決して安価とはいえないラインナップなのだが、C.シファキス『詐欺とペテンの大百科』など売り切れアイテムが出るほどに、好評を博したのである。



▲阪急ブックファースト渋谷店4F人文書コーナーで実施された「シャルラタン」フェア。書店で展開されるさまざまな企画が、読者と本と街を結ぶ。写真右は永岡氏。

状況雑感

虚構の力——大学は無料になるのか？

●白石嘉治(上智大学他、教員/文学)

シャルラタンの拠り所である「虚構」は昨今評判が悪い。たとえば文学にたいする敵意と無関心もそこに由来する。都立大学の文学専攻も消滅せざるをえない。これも時勢なのだろう。だが、われわれは何ら虚構もなく、「現実」に開かれているべきなのだろうか？ この開かれた態度自体、「現実」の名のもとでの篡奪を許す条件になっているのではないのか？

実際、文学部のみならず、大学にたいする批判はつねに「現実」の名のもとに行われる。しかし、それは肝心な点で盲目である。すなわち、高等教育にたいする公的財政支出のGDP比は、OECD(経済協力開発機構)加盟国平均では約1%だが、日本はその半分にも及ばない。日本のGDPはおおよそ500兆円だから、国際的な標準値5兆円には2兆5000億円ほど足りない計算になる。この不足分は先般りそな銀行に投入された公的資金よりも若干多い程度金額だが、単純計算するなら、私立をふくめた大学の授業料全体に匹敵する。つまり標準値からの不足分さえ投入されれば、大学は経営危機どころか、学費の無料化すら可能である。

もちろん、これは国際的な現実根ざした机上の空論にすぎない。何らかの理由で、大学生全体よりも、数千人の都市銀行員の利益への関心を優先しなければならぬのだろう。だが、たとえ空論であっても、学生と大学人が切実に願うならば、虚構の力が行使されるときがくるのではないのか？ それは、かつてのシャルラタンの活躍がわれわれに告げている希望でもある。

編集後記▶当会第15回例会では、蔵持氏の民族歴史学の一大成果『シャルラタン』を取り上げた。一昨年の夏、初めて本書の構想を聞いた時、「異形精神」というテーマに出版の社会的意義と重要なメッセージ性を感じ取った。私たちの経済社会は拝金主義と誇大宣伝から脱し切れぬシャルラタニズムで依然溢れている。それを丸裸にする真の批判精神を読者に伝えたいと思った▶完成間近、その批判はまず自分に返ってきた。年間約7万点の新刊洪水の中で、インパクトある書名、キャッチコピーと、気づけば読者を魅了する「口上」に心を砕いている。本書の製作過程で自らを問うた。私は一編集者として、この作品の核心部を見逃し、「口上」の虚実の世界に自ら嵌り込んではいまいか▶最終的に本の帯のメインキャッチは「正統者の虚実を喰う異形精神の源流」とした。ズバリ核心を訴えてまず信頼を獲得する正攻法的シャルラタニズム。本の宣伝は奇抜だけでは成立しない。広告といえども読者の想像力を刺激する内容の錬磨がなければ、著者の言う「知的な架橋」を実現し、「本離れ」の状況を真に変える力にはなり得ない。『シャルラタン』製作担当者]